

【5歳児 1月の事例】

話し合って折り合いをつけて遊び、仲間と楽しさを共感する  
「分かった。じゃあ、ぼくとB君分かれよう」

- ① 登園してきたA児とB児は、すぐに園庭に飛び出しボールを手にして、「みんな来るから大きくしよう」と言って、「1・2・3・・・」とドッジボールのコートを歩幅で測り、棒で線を描いた。次々と幼児たちが集まり、「僕、青チーム」「私緑色チーム」と分かれ、A児とB児は青チームに並んだ。
- ② A児とB児は、いつも一緒にチームで勝つことが続いているので、周りの幼児からは「A君とB君、強いもん」「ずるい」という声があがった。C児が「A君たちが勝つに決まってる」と言う、「そうだよ」「強いよね」「ずるい」「青チームがいいな」などと他児も言い始めたので、保育者は傍らに行き幼児たちの話を聞いていた。
- ③ A児が「C君だって投げるのうまいじゃん」、B児が「そうだよ。ぼく当たったことある」と言う、C児は、「うん。当てたことあるけど、A君のボールすごく強いからとれないんだ」と言った。D児も「そうそう。超スピードあるし」、E児も「すごく速いよね」と言う、A児は困ったような表情になった。
- ④ すると、F児が「昨日、僕とったよ」とボールを抱えたポーズでうれしそうに言った。A児に憧れているF児は、昨日のことがとてもうれしかったようだ。保育者が「すごいねF君、とったんだ」と言う、A児も「そうそう、F君にとられちゃった」と言いながら少し表情が柔らかくなった。G児が「私は、いつも逃げちゃう」と言う、A児が「Gちゃん、逃げるのうまいから当たらないんだよ」と言った。すると、G児が「Hちゃんもうまいよね」と言う、H児が「ピュって逃げちゃうもん」と笑いながら言って和やかな雰囲気になった。
- ⑤ A児が「分かった。じゃあ、僕とB君分かれよう」と言う、B児も「いいよ」と言って、A児とB児が分かれてチーム作りをした。
- ⑥ ドッジボールは大接戦になり「面白かった」と、A児もB児もチームの仲間とハイタッチをして喜び合った。



幼児の姿から『学びに向かう力』を読み取ると…

【目的の共有】 【数や形への関心】	【言葉による表現】	【葛藤】	【相手の気持ちの 受容】	【折り合い】	【充実感】
①ドッジボールをしようと登園し、自分たちで歩幅を数えてコートを描いた。	②A児たちへの不満を言葉で表した。	③一人一人の話を聞いたり返したりしながら自分の思いと向き合った。	④互いの力やその子らしさを認めながら話した。	⑤友達や保育者の話を聞いて、B児と分かれようと思ひ提案した。	⑥自分のチームの仲間と力を合わせて遊び、「面白かった」と満足した。

学びに向かう力

自分の気持ちを調整する力

粘り強く  
取り組んだり  
挑戦したりする力

仲間と協調する力

学びに向かう力を育むための手立て

環境の構成のポイント

「自分たちで遊びの環境を整え、楽しめるようにしましょう」

- 5歳児後半になると、仲間と共通の目的をもって遊びや生活をしようとし、自分たちで環境を整えるようになります。ドッジボールのライン引きなども、保育者が幼児と一緒に形や広さを考え、描き方を見せていくと、次第に自分たちで行うようになります。
- 遊びによっては大きな遊具や用具を扱うこともあるので、安全に留意して使えるようにしておきます。
- 幼児たちが分かり合って遊びに取り組むことができるように、話し合いの時間を確保します。

保育者の関わりのポイント

「話し合いながら葛藤や気持ちの調整をする経験ができるようにしましょう」

- 5歳児後半になると、幼児はその子らしさを発揮するようになり、互いにその姿をよく見ています。その姿を受け止め憧れながらも、時には「ずるい」「勝てない」などと言って、悔しさやいら立ちの気持ちを表します。
- 保育者が、善悪という判断をするのではなく、幼児が自分の思いを出しながら話し合う中で、葛藤したり自分と向き合ったりする経験を得られるようにします。相手の話を聞くこと、話を聞いて自分はどうか考えること、そして考えたことを相手に伝えること、このような話し合いの経験を生活や遊びの中ですることが大切です。



家庭での関わりのポイント

「幼児が自分の気持ちを素直に出して話せるように、しっかりと耳を傾けましょう」

- 5歳児後半になると、いろいろなことに挑戦し、意欲的に取り組むようになります。その中で、自分の力を知ったり友達と比べたりして、自分と向き合うようになります。その時の友達への不満や自分の考えなど幼児の素直な気持ちを共感しながら聞いてください。
- 幼児は自分の考えや頑張りが認められることで、相手の思いを受け入れたり認めたりしながら、自分の気持ちをコントロールする力が育っていきます。
- 幼児が素直に思いを出せるよう、単に「良い」「悪い」という判断は、避けましょう。